

箱根大名行列

江戸時代（1603–1867）、統治していた徳川幕府は、支配下にあるすべての領地の大名は隔年で江戸（現在の東京）に住まなければならないとする政策を打ち立てました。大名はそれゆえ定期的に江戸と居住する地方との間を移動することを余儀なくされました。大名の妻と子供は都に残ることが要求され、忠誠を担保する人質の役割を果たしました。この政策の目的は、大名が幕府への反乱に繋がりうる手段を手にするができないよう、またそのような距離に入れないようにすることでした。大名が江戸と各地方との間を移動する際は適切な人数の侍の同伴が必要で、また他の様々な同伴者も同行しました。各地の領主はその名声と富をひけらかそうと、家臣に豪華な衣装を着させ、他にも豊かさを象徴する物を持たせたため、大名行列はしばしば豪華に飾り立てられたものになりました。

11月3日には箱根湯本でそのような行列の豪華さを垣間見ることができます。毎年行われる箱根大名行列で、時代衣装を纏った約170人の男女が旧東海道の一部を行列で歩きます。今では地域の秋の風物詩となったこのイベントは

1935年に初めて開催され、箱根が属した小田原藩の江戸時代の行列を再現しています。その歴史的な正確さに疑問の余地はあるものの、この大名行列は想像力を掻き立て続ける歴史的野外劇を鮮やかに再現するものです。